

第10回 ESD・社会科理論研究会

◇開催日時 平成29年6月22日(木)20時～22時

◇会場 中澤研究室

◇参加者 河野・新宮・島・中澤哲・中澤静

◇内容

『学びとは何か』今井むつみ、岩波書店、2016年

第6章「生きた知識」を生む知識観

「知識とは何か」「よりよく学ぶためにはどうしたらよいか」

エピステモロジー：知識観、知識についての認識

「生きた知識とは何か」

- ・多くの人が共有しているエピステモロジー
知識は客観的なものであり、「事実」である。
- ・知識のドネルケバブ・モデル
客観的な事実「知識=事実」ぺたぺた張り付けて
いても、「生きた知識」にはならない。
- ・知識のシステムは要素が加わることによって絶え
間なく編み直され、変化していくもの。
- ・生きた知識は自分で発見するもの
「自分で探す」要素を見つけながら、要素どうしを
関連付け、システム自体も発見していくので、使うことができる。
- ・世界は客観的に存在しても、それを視る私たちは、知識や経験のフィルターを通して世界を視てい
るのである。
- ・新たな知識は、既に知っている知識を様々に組み合わせることで生まれる。
- ・人は、想像力といま持っている知識とを組み合わせることによって、無限に新しい知識をつくって
いくことができる。
- ・経験が外枠をつくる。それを要素との整合性を考慮してつくりかえていく。
- ・子どもは個別の要素を学習してだけでなく、それを学習するためのスキーマをつくっていく。
- ・子どもは「思い込み」を使って、次に起こることを予測したり、新しい要素の学習をしている。
- ・システムをつくっていくためには、システムの外枠ができていることが大事だ。すでにシステムの外
枠ができているならば、新しい要素は最初からシステムの中にすでに存在している要素と関係づけられなが
ら学習されることになる。要素が互いに関係づけられる形で、構造を持ちながらシステムとして成長し
ていく。
- ・知識がどのように構築されるかを理解していないと、どれもが正しい、という相対主義に陥ってしま
う。
- ・科学はデータをもとに論理を組み立て、理論を構築するプロセスである。

科学的知識とは

①証拠によって実証されるべきものである

②そのためにはモデルを構築し、実験によって具体的な吟味可能な仮説を立て、実験からの証拠に照
らして評価されなければならない。



③仮説は多くの場合、複数あり、それらの仮説のうち、どれが最も優れたものであるかを、証拠に照らして評価する必要がある。



- ・批判的思考とは
Argue とは、エビデンスを積み上げていって論理をつくっていくという意味。
Evidence とは、要素を整合性がとれるように組み立て、構成した論理の不可分な全体
- ・批判的思考とは、科学的思考と同じで、ある仮説、理論、あるいは言説を、証拠にもとづいて論理的に積み重ねて構築していく思考のしかた。
- ・これまでに考えられてきた、言われてきた言説を再考し、証拠に基づいて考察・評価する。
- ・批判的思考のプロセス 自分で仮説を考え、実験をデザインし、データをとって分析し、吟味し、論を構築し、それを評価する。これを繰り返すことで、体得する。

・豊富で精緻な知識を持っていると、直観の精度が上がり、「ひらめき」になる。直観力を磨くためには、振り返りが重要だ。

◇子どもの知識のシステムを洗練化させる効果的な振り返りの方法を考える必要がある。

子どもの書いたもの（振りかえり）に対するコメントがポイント

Before after を子どもに可視化する。巻物の有効性

自分と似ている振り返りを見つけさせる。

相互評価を通した自己評価

單元ごとの振り返りを比較して洗練化をはかる。

次回は、7月31日（月）16時～

第7章と終章を購読します。